

観念論と反観念論

——亡命期間におけるアドルノの現象学研究と観念論をめぐる問題——

Idealism and anti-idealism.

— Adorno's phenomenological studies during his exile

青柳 雅文*

はじめに

Th・W・アドルノは生涯に渡って、E・フッサールの現象学に関する研究をおこなっていた。彼の一連の研究は、1956年刊行の『認識論のメタ批判 フッサールと現象学的アンチノミーに関する諸研究』（以下、『認識論のメタ批判』と略記）に結実するが、その礎は1930年代の彼の亡命期間中に築かれていた。それゆえ、この亡命期間中に彼が現象学をどのように理解していたかについて解明することで、彼の現象学研究の全体像を明らかにする道が開かれることになるであろう。

本稿は、亡命期間におけるアドルノの現象学理解について解明することを目的とするが、とくに観念論をめぐる問題と関連づけられる限りでの現象学理解を考察対象とする。アドルノはアメリカに渡った際に、観念論と結びつけて現象学を取り上げて講演しているのである。もちろん、アドルノの観念論研究の射程は現象学に留まらない。だが本稿は、あくまで彼の現象学研究の枠内で観念論の問題を扱うものである。また以上の考察をつうじて、彼が現象学の中に反観念論的契機を見出していることも明らかにする。

以下では、亡命期間におけるアドルノの講演を取り上げて、彼の現象学理

* 立命館大学文学部非常勤講師

解、および観念論をめぐる問題について考察する。この考察に先立って、亡命以前の初期アドルノにおける現象学理解を取り上げて、初期から亡命期間に至る彼の思想の形成過程を確認する。その上で、当該講演について検討したい。

1. 初期アドルノにおける現象学理解と観念論

アドルノは亡命以前の初期の段階から、観念論に関連づけながら現象学を取り上げている。そこで、初期アドルノにおける現象学理解について、そして観念論と連関する限りでの彼の現象学理解の形成過程について概観する。以下では、まず彼の主張を整理して、その上で彼の現象学理解について考察する。

1-1 学位論文におけるアドルノの理解

アドルノが観念論と関連づけて現象学を論じた最初のもは、1924年に提出された彼の学位論文「フッサール現象学における物的ノエマ的なものの超越」(以下、学位論文と略記)である。この論文の主題はフッサールの現象学だが、その中で実際に観念論について言及している箇所はかならずしも多くはなく、用法も限定的である。彼は次のように述べている。

超越論的観念論として、フッサールの現象学は理解されなければならない。意識は現象学にとって「絶対的根源という存在領域」として妥当し、意識が「現実性に関して判断し、現実性について問い、推測し、現実性を疑い、その疑いに決定を下し、そしてその際「理性の判決」を遂行する」のであり、「超越論的意識の本質連関」において「この権利の本質——判決を下す理性の〔本質〕——「およびそれと相関的に「現実性」の本質が……明瞭にされ」なければならないとされる。(GS1. 13)

〔……〕 超越的世界の定立は、意識を「絶対的根源という存在領域」として前提とすることと矛盾する。つまりそれは、超越論的観念論の根本原理と矛盾するのである。(GS1. 17)

これらの引用¹⁾において、アドルノはフッサールの現象学を超越論的観念論²⁾として特徴づけている。それは意識の根源性を前提として、それにもとづいて現実性の本質を問う主張である。この超越論的観念論は、I・カントの哲学に由来する。というのも、アドルノの議論は、論文全体としては、カントの影響を受けたH・コルネリウスの哲学が下敷きになっているからである³⁾。アドルノによれば、現象学は矛盾をかかえており、超越論的観念論として不十分なままだとされる。これにたいして彼は、超越的世界の想定を退け、物を意識の体験連関における法則と位置づけようとする。そして彼は全体論的な観点から、超越的世界を意識内在へと還元することで、矛盾の解消を図り、すべてを意識にもとづいて一元的に説明可能だと主張したのである⁴⁾。

1-2 私講師就任講演におけるアドルノの理解

フランクフルト大学で学位と教授資格を取得したアドルノは、1931年5月に私講師就任講演「哲学のアクチュアリティ」(以下、私講師就任講演と略記)をおこなった。この講演でも、観念論と関連づけられて現象学が取り上げられている。講演の冒頭で、彼は次のように述べている。

こんにち哲学研究を職業として選択する者は、かつてさまざまな哲学的企ての出発点に位置していた幻想、すなわち、思考の力によって現実の総体を把握することができるという幻想を、放棄しなければなりません。(GS1. 325)

ここで彼が想定している主張が観念論である。それは自律的なラチオ、つまり理性によって現実性をくまなく把握可能であるだけでなく、自らその現実性を展開することもできるような主張であり、それをアドルノは「大きな総体的哲学」(GS1. 331)とも呼んでいる。そしてこれと同時に、彼はここに「観念論の危機」(GS1. 326)が生じていると指摘する。この危機とは、すべての観念論において「自律的なラチオ〔……〕は、現実性の概念およびすべての現実性それ自体を自分自身の内部から展開することができる」と主張されていたが、「まさにこの主張が消え去った」(ebd.)という状況であり、まさにそれは観念論の崩壊状況である。アドルノは、この状況にたいする哲学の可能性を問い、その中で引き合いに出すのが現象学である。現象学がおこなったのは、「観念論の諸体系の崩壊の後で、自律的ラチオという観念論の道具を用いて、主観を超えた拘束力を備えた存在秩序を獲得しようとする努力」(GS1. 327)であり、また「デカルト以降の主観的な思考が生み出したのと同じカテゴリーを介して、その意図と根源的に矛盾する客観性そのものを獲得しようとする努力」(ebd.)であった。アドルノからすれば、観念論の危機を克服しようとしたのが現象学であり、その際「フッサールにおいて現象学はまさに超越論的観念論から出発した」(ebd.)のである。つまり「この〔超越論的観念論の〕理念は、フッサールにおいて、最終的に定式化されており、つまり「理性の判決」が理性と現実性の関係にたいする最後の審級でありつづけているということであり、したがって、フッサールの叙述のすべてはこの理性の圏域に属していること」(GS1. 328)であり、そのもとで現象学は観念論の危機の克服を目指したのである。

しかしながらアドルノは、現象学による危機克服の試みを成功しているとみなしていない。その代わりに彼は、「意図〔=志向〕なき現実性の解読」(GS1. 335)をおこなう唯物論 Materialismus を構想する。彼にとって唯物論とは、無批判に物質を基礎におくような立場や、物質を素朴に前提とする立場のことではない。むしろ彼は唯物論を、「現実性の持つ意図的〔=志向的〕

なもの、有意味なものという表象をもっとも厳格に拒絶する種類の思考」(GS1. 336)と定義する。そして「分析をつうじて孤立させた諸要素を組み合わせることで、意図〔=志向〕なきものを解読すること、そして、そのような解読によって現実的なものを照らし出すこと、これが真正の唯物論的認識すべてのプログラム」(ebd.)だと述べている。この彼の言う唯物論のプログラムは、現実性を把握するのと同じように思考するのだが、その主観的な意図(=志向)からこぼれ落ちるものを拾い上げるような別種の思考であり、観念論の枠内で、そこから逸脱するものを受け取ろうとする思考である。その意味で唯物論は、観念論と外面的に対置されるのではなく、むしろ観念論の自己批判として理解されるであろう。講演は綱領的ではあるが、彼はこうした構想を提示することで、哲学の可能性を開こうとしたのである。

ところでアドルノは、学位論文に引き続いて私講師就任講演においても、フッサールの現象学を超越論的観念論として位置づけている。ただしアドルノは講演の中で、「超越論的観念論」という語を、現象学を取り上げるときにのみ用いており、崩壊状況にあるという「観念論」から区別して用いている点には注意が必要である。この点については、次節で検討することにした。

1-3 初期アドルノにおける現象学理解と観念論

さて、以上の二作品においてアドルノは、観念論と関連づけながら現象学について論じていたが、この両作品の間には、観念論と現象学にたいする彼の理解の変遷が見受けられる。ここでは前節までの内容も踏まえて、初期アドルノにおける現象学と観念論にたいする理解について考察する。

初期アドルノにおいて現象学は、首尾一貫して超越論的観念論として位置づけられている。この位置づけ自体には変化がないので、彼が超越論的観念論に与えている意味も変わりはないと考えられる。ところが前節でも指摘したように、私講師就任講演においては、超越論的観念論と区別される観念論

が用いられていた。ではこの両者の間には、どのような相違が見られるのであろうか。一方の超越論的観念論は、カントの哲学に由来し、認識の根源にア・プリアリな形式として(超越論的)意識を位置づけた。アドルノは学位論文において、このカント的な立場から現象学を理解し、意識にもとづく認識の一元的な説明をもとめたのである。これにたいして、私講師就任講演において彼が観念論について言及する場合、その根源にラチオすなわち理性が位置づけられた。意識も理性も、いわゆる近代以降の主観・客観図式に照らし合わせれば主観の側にあてはまり、どちらも同じ主観を指すのだとすれば、観念論も超越論的観念論も同じであるようにも思える。しかしながら、私講師就任講演で用いられる観念論は、認識論的に現実を把握するだけでなく、自ら現実を展開しようという存在論的で形而上学的な主張でもあり、その点で、認識可能性を問う超越論的観念論とは異なる様相を呈している。また見方を変えれば、アドルノが現象学を性格づけた超越論的観念論は、彼の言う観念論を認識論的に限定した見解だとみなすこともできるであろう。いずれにしても、アドルノはこの両者を区別して用いている。だがその一方で前述のように、どちらも主観主義的あるいは意識中心主義的な主張だという点では同じものとして理解可能である。つまりどちらも主観を根源的なところに想定した主張なのである。

次に現象学にたいする理解である。前述のように、アドルノは現象学を超越論的観念論として位置づけ、「大きな総体的哲学」としての観念論からは区別して扱っていた。この限りで、彼が現象学を認識論的主張として理解していることがわかる。また前節で示したように、彼にとって現象学は、観念論の危機、その崩壊状況において登場した主張であり、それはいわば観念論による観念論克服の試み、観念論の自己超克の試みとして位置づけられるのである。この試みにたいして、アドルノが与えた評価は二面的である。一方で彼は、現象学によるこの試みが、観念論を突き破ることができなかつたと評価する。というのも、現象学においては「〔……〕自律的精神が支配して

いる」(GS1. 328) のであり、結局は観念論の主張と同様に主観主義、意識中心主義に留まっており、根源にある主観に依拠しているならば、現象学による試みには限界があると言わざるを得ないからである。だが他方でアドルノは、現象学による試みが観念論の自己批判、自己超克の可能性を示したという点について、肯定的に評価する。これは現象学を、まさに崩壊状況にある観念論から区別して扱っていることからわかる。さらに次章でも取り上げるように、彼は亡命以後も引き続き現象学と向き合い、論じ続けていることから、彼が現象学につねに何らかの可能性を抱いていたのであろう、ということも窺い知ることができるのである。

以上のように、アドルノは当初から、現象学を超越論的観念論として、あるいはそれに端を発する主張として位置づけている。そして彼は現象学を、「大きな総体的哲学」としての観念論から区別して扱った。だが彼にとって現象学の主張は、観念論批判として不徹底なままに留まっていた。これについてアドルノは、学位論文では超越論的観念論の徹底を図ることで、そして私講師就任講演では観念論の自己超克の試みとみなすことで、それぞれ肯定的に評価していた。とはいえ彼にとって現象学の一連の試みは、成功しているとは言い難い。このような状況にたいしてアドルノは、私講師就任講演の段階では唯物論を構想し、現象学とは異なる仕方での観念論批判の可能性を示していたのである。

2. 亡命期間におけるアドルノの現象学研究と観念論をめぐる問題

1938年2月、アドルノはイギリスを離れ、アメリカ・ニューヨークへ渡った。彼は、すでに渡米していたM・ホルクハイマーらと合流し、コロンビア大学に移設された社会研究所での共同研究に参加した。また渡米直後に彼は、P・ラザースフェルドの主宰する「ラジオ・リサーチ・プロジェクト」に加わった。こうした中で、1939年5月にコロンビア大学でおこなわれたのが

英語の講演「フッサールと観念論の問題」(以下、アメリカ講演と略記)である⁵⁾。この講演は、彼がイギリス滞在期間におこなった現象学研究を基礎にしており、その中でも観念論と関連づけられている点で特徴的である。そこで以下では、この講演におけるアドルノの現象学と観念論にたいする理解について取り上げながら、そこから提起されるいくつかの問題について考察することにした。

2-1 アメリカ講演における現象学理解と観念論

アドルノは、講演においてまず次のように述べている。

哲学者は確固とした一連の反駁不可能な結論を導き出さなければならぬという考えは——フッサール自身ならきつと共有したであろう考えですが——、哲学者が自ら設定した課題がすべて実際に果たされること、そして哲学が打ち立てたあらゆる問いに答えがありうることを前提としています。しかしながらこの想定には疑問があります。ありうるとするならば、首尾一貫した思考過程において必然的に生じるのだとしても果たされえない哲学的課題です。(GS20. 119)

引用にあるような、哲学者が自ら設定するが果たされていないという課題について、アドルノは「問題そのものに本来備わっている拮抗関係に根ざしたこと」(ebd.) だとした上で、「私が観念論の問題を論じるのは、このことに関連しています」(ebd.) と述べている。このようにアドルノは、哲学の取り組むべき課題の根元に何らかの拮抗関係を見出しており、そしてこのことが、彼が観念論の問題を取り上げる動機となっている。さらにこの観念論の問題を論じるために彼が手がかりとするのが、フッサールの現象学である。それゆえ、アドルノにおける観念論をめぐる問題と現象学理解をつうじて、彼の指摘する拮抗関係も明らかにされることになるであろう。

アドルノは講演において、観念論を「実在性や真理のような概念を意識の分析に基礎づけようとする哲学」であり、「究極的に客体と主体の同一性を確立できるという一般的前提から始まる」(ebd.) 主張だと定義している。そして彼は現象学について、「そもそもフッサール哲学は、観念論を内部から破壊する試み、意識を手段として超越論的分析の壁を突破する試みですが、同時にその分析を可能な限り支えようとしている」(GS20. 120) 主張として定義している。こうしたアドルノの一連の定義を見る限りでは、彼の観念論と現象学にたいする理解は、初期の思想から大きく変化していないように思われる。だがこのアメリカ講演において彼は、現象学が主題だということもあり、以前よりも立ち入った議論をおこなっている。

この講演においてアドルノは、現象学がおこなったとされる前述の試みが、異なるふたつの観点からおこなわれていることを示している。その第一の観点は、「真理のアプリオリな要素は主観的に構成⁶⁾されるのではなく、厳密に対象的な性格を持っている」(GS20. 121) ということである。アドルノはこの観点を、現象学が意識による主観的な構成を退け、意識の直接的所与、あるいはいわゆる〈事象そのものへ〉のまなざしをつうじて、本質としての対象を把握することだと理解する。そしてこのことから、彼は現象学に「反カント主義的傾向」(GS20. 121) があるとみなしている。ここでアドルノは明らかに、フッサールの現象学をカント的な超越論的観念論とは異なる立場として理解している。前章で示したように、初期アドルノにおいては、フッサールの現象学は、不徹底であれカント的な超越論的観念論の系譜上に位置づけられていた。だがこのアメリカ講演では、超越論的観念論について言及することがないばかりか、現象学が反カント主義的な傾向を持つものとして扱われている。したがって、現象学はこの第一の観点を持つのだとアドルノが理解する限りでは、彼の現象学理解に変化が生じていると言えるのである。

次に、アドルノが示した現象学の第二の観点は、「フッサールは、真理の

究極的源泉が意識の統一だと仮定する」(GS20. 120)ということである。このことは、フッサールがその初期の段階から心理学主義的な実証主義を徹底的に拒否していたことからわかる⁷⁾。この観点をアドルノは、現象学が意識に端を発し、意識を根源においた主張のことだと理解する。そしてこの観点は、学位論文以降のアドルノの現象学理解とも合致しているし、この講演における彼の観念論の定義とも合致している。ただし、この講演での定義と、前章で言及した私講師就任講演における観念論の特徴とを対比した場合、両講演の間には相違がある。後者の講演において観念論は、思考によって現実の総体を把握できる主張として特徴づけられ、この観念論の中にアドルノは現象学を位置づけていた。だが前者の講演における観念論は、たとえばG・W・ヘーゲルに代表されるドイツ観念論のような、力動的な過程や展開をとまっておこなわれる主張をかならずしも意味しない。アドルノによれば、「フッサールはつねに思考を、作用としてではなく事象を見ることとして、すなわち美術館の絵のように事象に静かに対面することとして解釈していた」(GS20. 121)とされる。その点で「フッサールは、その時代のもっとも静態的な思想家であった」(ebd.)のである。ちなみに、この観点のもとで出てくるのが直観の概念であり、後述のように、アドルノはこの概念に注目している。

フッサールの現象学が以上のようにふたつの観点を持っていることによって、ひとつの問題が生じてくる。それは意識と対象との関係、とくに両者間の距離に関する問題である。前述のように、現象学は一方で主観的な構成主義を拒否し、真理の对象的性格を強調した。他方で現象学は、真理の根源を意識にもとめ、意識において対象を統一的に把握しようとした。このことを距離という観点で見たとき、一方では意識と対象がたがいに離れ、両者間に距離があるのにたいして、他方では対象が意識へと還元され、一体となっている。それゆえ意識と対象の間には、距離がありかつ距離がない、という矛盾した状況に陥ることになる。したがって、このふたつの観点を

フッサールの現象学が両立させているとするならば、この矛盾の解消を図らなければならなくなるのである。

ではこの矛盾をフッサールの現象学がどのように解消しているのか、アドルノは、その手がかりが事実 fact の概念にあると考えている。彼は「彼 [= フッサール] は事実そのものを、すなわちあらゆる事実的存在と無関係な理念的統一として数学的真理という「事実」を主張していました」(GS20. 123) と述べており、現象学においてふたつの事実概念が峻別されていると理解する。アドルノからすれば、フッサールにとって「事実そのもの」、「理念的統一」、「数学的真理」こそが「事実」なのであり、それは対象的でありつつも、なおかつ意識との関係において把握可能なものである。そして彼は文字どおりの事実的存在、つまり現実の实在をそこから除外するのである。こうしてフッサールの現象学は、数学的真理のような理念的で論理的な対象を「事実」とみなすことで、ふたつの観点をともに保持しながら、意識と対象との距離に関する矛盾を解消しているのである。アドルノは、こうした矛盾の解消を含むフッサールの一連の試みについて、次のように述べている。

彼の心理学主義にたいする闘争は、独断的な偏見の再導入を意味するのではなく、「事実」という素朴で無批判な宗教の含まれた偏見から批判的理性を解放したことを意味します。この「事実」が心理学主義的な点に、フッサールは異を唱えていました。このフッサール哲学の要素に、こんちでさえも私はその「真理」を見えています。(GS20. 124)

そしてアドルノは「この点に意義を認めています」(ebd.) と述べて、引用にあるフッサールの姿勢を肯定的に評価している。このように明確に肯定的な評価をおこなっているこの箇所からは、アドルノのフッサールにたいする態度が端的に現れていると言えよう。

ところで、フッサールの現象学がおこなった矛盾の解消は、同時に別の帰

結をもたらすことになる。アドルノによれば、「論理的真理を心理学的に還元することができないことによって、フッサールは実在的なものと理念的なものとの完全な切断に至る」(GS20. 125) ことになる。フッサールは、「事実」概念の導入によって意識と対象との距離に関する問題を調停したものの、同時に「事実」と事実の区別を生み出してしまっている。アドルノは、このようにフッサールの現象学において、矛盾の解消が理念的なもの¹と実在的なものとの切断を引き起こしている²と理解するのである。

2-2 直観と充実をめぐる問題

さて、フッサールの現象学が理念的なもの¹と実在的なもの²の切断という帰結に至ったことは、問題の解決として十分だったとは言い難い。アドルノがそのように考えているのはもちろん、フッサールも同様に考えた³とみなしている。アドルノによれば、「フッサールは〔……〕この実在的なものと理念的なものというまったく調停できない二元論を、これまでのあらゆる哲学と同様に寛大に扱うことができなかった」(GS20. 125) のである。そこで今度は、理念的なもの¹と実在的なもの²の統合が試みられることになる。アドルノによれば、この統合のために「理念的なもの¹と実在的なもの²の橋」(GS20. 126) の役割を担っているのが、カテゴリー的直観の理論である⁸⁾。そしてこの理論が「フッサール哲学における観念論の問題の、まさに中心につうじている」(GS20. 127) のであり、さらに「カテゴリー的直観の学説は、思考する主観に関する論理絶対主義の必然的帰結」(GS20. 127-128) だと指摘している。アドルノは、カテゴリー的直観の理論をつうじて、彼の言う観念論の問題を解明することができる⁴と考えているのである。

彼はまず、カテゴリー的直観の理論について、「われわれによって生み出せない理念的諸事実 *Ideale Tatbestände*⁹⁾ を「考える」ことができ、そしていまだにその絶対的妥当性を合理的明証⁵⁾にしているこうした橋」(GS20. 127) であって、「真理そのもの」、対象的にあらかじめ与えられたあるがままの

理念的事態が、「それらを一瞥すること」(bloßen Hinblick)によって明証的になるというのが、カテゴリー的直観の理論の命題なのです」(GS20. 128)と理解している。カテゴリー的直観においては、理念的で論理的な対象である事態¹⁰⁾についても、感性的に知覚可能な対象の場合と類比的に、直観的に把握できる。アドルノはこのように理解した上で、「カテゴリー的直観の学説全体の核心は、充実の理論です」(GS20. 129)と指摘している。そもそもフッサールの現象学においては、意識が対象について志向するだけでなく、直観をつうじて意味が充実され、明証的にならなければならない。これは事態の場合も例外ではない。つまり事態は「それ自身の直観によって、つまり感覚的ではないが直接的な認知によって充実される」(GS20. 130)のである。だがこれにたいしてアドルノは、「厳密に言えば、フッサールは、現象学的方法によってカテゴリー的直観にたどり着いていませんし、彼はカテゴリー的直観の実際のはたらきを記述しているのではなく、何らかの仮説的な仕方ではたらきを導き出しているのです」(GS20. 130-131)と指摘する。さらにアドルノは、この事態の認知、あるいは彼がフッサールから引き合いに出した表現で言えば、「何かを与える認知作用 gebender Akt der Gewährwerdung」(GS20. 131)に含まれるあいまいさについて、次のように述べている。

フッサールが事態の認知に与えている直接性という性格は、あるいは so や and のような用語の背後にあると想定されている理念的な存在は、実際に判断する作用の直接性にほかなりません。それは次のように定式化されるでしょう。つまり判断は、主観的に見れば、ひとつの作用、ひとつの経験であり、そのようなものとして何らかの直接的に与えられたものなのです。〈判断すること〉あるいは〈判断された事態を認知すること〉は同じことであり、あるいはより正確に言えば、第二の表現は第一の表現を比喩的に限定づけたものです。もちろんその判断を反省することなしに、実際に判断すること自体だけでなく、さらに判断したものの

認知という第二の作用もありません。しかしながらそのような反省は、判断の実際の作用の「直接性」をかならず超越して、自ら反省の対象となることでしょう。しかしながら判断の直接性という意味は、事態の認知というフッサールの概念に含まれています。けれども事態を認知することは、フッサールにとって判断の真理だと再確認することも意味します。(ebd.)

アドルノによれば、判断は「自発的思考」(ebd.)を意味し、それ自体で直接的所与だとされる。また事態の認知は、事態の判断に含まれ、直接的認識として同一視される。だが彼からすれば、認知が可能になるためには、反省のはたらきが必要となる。そして判断がただちに認知となるのではなく、判断された事態を認知するという反省の過程を経て、判断が成り立っているのだとすれば、事態の認知は反省という媒介項をつうじて実現していることになる。つまり事態が認知されることによって判断されたこともわかるということは、間接的に事態を把握していることを意味する。判断は直観による充実を必要とするのだが、これにともなう反省は、「直接的でもなければ直観的でもない」(ebd.)のである。そしてアドルノは次のように述べている。

反省は、たとえ最終的に分析することで感覚的で知覚的な要素へと戻ってゆくとしても、反省それ自体に非知覚的で概念的な〔=媒介過程を含むような〕形式を含むことになるでしょう。フッサールは間接的なものを直接なものと呼んでいます。なぜならば、フッサールはそれが与えられると信じているからです。(GS20. 132)

こうした反省において事態を認知する際には、何らかのカテゴリー的形式を用いて実際に認知する。それゆえ反省は、事態を認知するために、あらたな事態を生み出すことになる。結局のところフッサールの現象学は、事態が充

実されるための何かを無批判に前提としているのである。

カテゴリー的直観の理論による理念的なものと実的なものの統合の試みは、以上のような困難をもたらすのだが、アドルノは「似たような困難がカント哲学において遭遇していたことを思い出します」(GS20. 126)と述べている。前述のように、そもそもフッサールの現象学は、主観的な構成主義と心理学主義的実証主義をともに退けるという「反カント主義的傾向」を持っていた。そして理念的で論理的な対象を直観的に把握しようとした。だがカテゴリー的直観の理論のように、この直観的認識が感性的直観と類比的におこなわれるのだとすれば、事態を充実する何ものかが前提とされなければならない。アドルノは、「フッサールは論理的諸原理を実体化しています」(GS20. 132)と指摘する。また彼によれば、これと同時に思考は「たんに受動的な受容性へと衰退する」(ebd.)ことになる。そして「フッサールにとって思考は、カントが超越的物自体によって触発されたものとしてわれわれの感覚を考えたこととかなり類比的に、理性真理によってある意味で触発されている」(ebd.)のである。したがってアドルノは、フッサールの現象学が観念論の問題を克服するどころか、カントと同じような困難に陥っていると考えている。その困難とはまさに、理念的で論理的な対象を実体として前提とする論理絶対主義であり、このことがフッサールの試みの結果として露呈したと言えるのである。

2-3 観念論における拮抗関係と反観念論

アドルノによれば、フッサールによる一連の試みは、「純粹に観念論的道具にとって、すなわち思想と意識の構造をもっぱら分析することによって、観念論の壁を突破しようとしている限りで、観念論的思考に背いて」(GS20. 133) いるものであった。またたとえば現象学が掲げる〈事象そのものへ〉というスローガンは、「物質へ帰ろうとする反観念論的な願望」(ebd.)、主観的な構成主義を破壊しようとする願望を示している。この点からすれば、現象

学は反観念論的だとみなすことができる。だがその〈事象そのものへ〉のまなざしは「絶対的に確実で、揺るぎなく、議論の余地のない真理を獲得する」(GS20. 134) ことをもとめておこなわれるが、それは「絶対的なものを獲得するために、そして最終的に絶対的な厳密さによってひとつの絶対的な点からあらゆるものを演繹しようとするために、反観念論の哲学の避難所に住まう観念論的愿望」(ebd.) をも示している。したがって、反観念論的なものは観念論的な愿望の中に留まっており、その帰結も観念論を突破することができないのである。アドルノは講演の最後を次のように締めくくっている。

フッサールの偉業の中で主要な反観念論者としての偉業とみなされた本質の学説は、結局自ら観念論の頂点として暴かれるのです。すなわち純粹本質は、つまりどの主観的構成もはねつけていると思われる対象性は、その抽象的なものを含んだ主観性、思考の純粹な機能、カントによる意識の統一という意味での「われ思う」にほかならないのです。(ebd.)

ところで、前節で示したように、アドルノはフッサールの現象学においてふたつの観点があると指摘していた。すなわち、主観的な構成主義を批判し、真理の対象性を主張する観点と、心理学主義的実証主義を拒否し、意識の統一性を主張する観点であった。そして同時にアドルノは、これらの観点を持った現象学を、観念論のひとつに含んでいた。さらに彼は観念論について、意識にもとづき、そこにおいて統一性を保持する主張だと定義した。このようにアドルノが示した現象学と観念論について、その位置づけを照らし合わせると、いずれも意識の統一性に基礎をおく主張だという点で共通している。この限りで言えば、現象学はやはり観念論のひとつに数え入れられるのだという見方も成り立つであろう。だが現象学にふたつの観点があるということは、現象学と観念論に共通の見方とは異なる面がそこに含まれていることを意味する。それはまさに、主観的な構成主義を批判し、真理の対象性を

主張するという観点のことである。観念論としての現象学がこうした観点を持っているということは、観念論自体もその観点を持っていると言えるし、またそれゆえ観念論にも現象学と同様のふたつの観点が備わっていると言えるのである。

では真理の対象性ということは、どのような意味を持ってくるであろうか。現象学において対象は、理念的で論理的な本質を指していた。理念的な対象を真理あるいは真実とみなす主張は、たとえばプラトンのイデア論に代表されるように、哲学史的には観念論（イデア主義）の系譜上に位置づけられる¹¹⁾。つまり、観念論がこのふたつの観点を持っているということは、観念論が元来含んでいる意味からすればごく当然のことだということなるであろう。だがアドルノは学位論文以来、観念論を意識に依拠する思想、意識中心主義として理解していた¹²⁾。そしてアメリカ講演においてもまた、彼はこの観念論理解を踏襲していた。しかしながら、前述のふたつの観点があることを踏まえれば、彼は観念論を、理念的対象を真理とする主張としても理解していることになる。つまり彼は観念論を、生来備わった二重の意味を持つ主張として理解していることになるであろう。このように理解しているがゆえに、彼は観念論としての現象学にふたつの観点を見出しているのだと言える。換言すれば、現象学におけるふたつの観点は、観念論におけるふたつの意味を表したものだとも言えるのである。

このようにアドルノは、観念論を二重の意味で理解している。だがこれだけであれば、観念論理解としては何も特別なことではないし、彼の議論にも特段の意義を認めることもできないであろう。しかしながら、彼が考えているのは、こうした観念論がそのもの二重の意味を持っていることが、観念論をめぐる諸問題を引き起こしているのではないか、ということである。つまりそこにアドルノの言う、観念論における拮抗関係がある。では、この拮抗関係はどのような状況であろうか。それを知るには、前述の対象概念が手がかりとなる。対象が対象だと言えるのは、まさに意識から超越したものだ

いう意味を持つからである。それはアイデアが現象から区別される真実在であることからわかる。だが同時にアイデアのような理念的なものは、事実的存在ではなく、意識の相関者として内在的なものである。それゆえ観念論において対象概念は、超越的でもあり内在的でもあるという相反的な意味を持つのである。さらにこの相反性は、意識概念にもあてはまる。すなわちそれは自己完結的な主体であるが、前述の対象概念によって媒介されたものでもある。つまり意識は、観念論にとって根源的なものであるが、対象概念なしに存立しえないものでもある。このように、意識も対象もそれぞれ相反的な意味をともに含んでおり、このことがアドルノの言う、観念論における拮抗関係を生み出していると考えられるのである。そしてそれは、観念論理解の伝統からすれば必然的な帰結であった。現象学の主張は、この伝統を踏まえていたとしても、アドルノにとっては十分だったと言えなかったのである。

だが、こうして観念論が拮抗関係に根ざしているということは、別の可能性も暗示している。アドルノは現象学を、観念論の自己超克の試みとして理解していた。この試みは、観念論の域に留まるという結末を迎えたとしても、観念論を乗り越えようという要素がなお含まれていたことを無視することはできない。つまり観念論は、そもそもそれ自体として反観念論的傾向を含んでいるということになるのである。その意味で現象学による一連の試みは、結果として観念論自体の反観念論的傾向を露呈させるのに寄与したと言えるのではなからうか。

アドルノはアメリカ講演において、現象学の反観念論的傾向を〈事象そのものへ〉のまなざしにあると指摘していた。このまなざしが反観念論的だとされるのは、それが事象という何らかの物質的、事実的、現実的な要素をもなうからであろう。事象は意識から区別される超越的な意味を保持し続けていると言えるのである。ただし同時にこの事象は、観念論の場合にはあくまで意識において把握されるものであり、意識との連関なしに把握されることはできない。それゆえ事象は、観念論的主張があってはじめて語られうる

ものなのである。換言すれば、事象はそれ自体で独立に存立するようなものでもなければ、意識の外部に素朴に実体化されるものでもないのである。観念論は、拮抗関係のどこに着眼点をおき、あるいはどこに力点をおくかによって、まさに観念論的にもなりうるし、反観念論的にもなりうるのである。

ところで、こうして事象に力点をおいたアメリカ講演での反観念論的傾向は、前章で取り上げた唯物論とも結びつくのではないであろうか。すでに示したように、アドルノにおいて唯物論は、たんなる物質中心主義や素朴実在論を指すのではない。また彼にとって唯物論は、観念論と外面的に対置されるだけの立場を指すでもない。むしろ唯物論は、主観的な意図（=志向）によって汲み尽くされるのではないものを受け取ってゆく主張であり、観念論と密接に関連しあう主張なのである¹³⁾。唯物論にたいするこのような特徴は、反観念論的傾向と共通するところがある。だがアドルノはアメリカ講演において、単独で唯物論について言及することがなく¹⁴⁾、現象学における反観念論的傾向について述べるに留まっている。唯物論ということに限って言えば、彼は私講師就任講演よりも主張を後退させてしまったようにも見える。ではなぜ彼は唯物論を積極的に論じることがないのか¹⁵⁾。その理由を彼が直接表明したことはないが、唯物論の概念が意味することから、彼の立場を窺い知ることは可能であろう。彼にとって唯物論は、観念論にたいする批判的で否定的な主張を指している。つまりアドルノにとって唯物論は、あくまで観念論の否定態、反観念論という意味を持つものであって、観念論との関係において意義を持つ主張である。唯物論を単独で取り上げて論じるということは、唯物論の概念の実体化を招きかねない。むしろアドルノにとって唯物論は、このような実体化を拒否する主張である。このことから、彼は唯物論をそれ自体として積極的に論じないことによって、実体化を回避しようとしたのだという考えも可能なのではなかろうか。また見方を変えれば、観念論は、アドルノにとっては反観念論としての唯物論との関係においてなお意義を持つことができるであろう。そしてこのことは、観念論の自己超克の

試みである現象学にもあてはまるであろう。アドルノにとって現象学は、観念論のひとつでありつつも、反観念論的でもあるという点で意義を持つのである。

おわりに

アドルノは現象学研究をつうじて、観念論をめぐる問題について論じた。亡命期間の彼は、観念論にたいして、一方では崩壊状況にあると認識し、その根元に拮抗関係があると指摘した。他方で彼は、観念論それ自体に問題克服の可能性があると示した。それを彼は現象学の試みの中に見出していた。彼にとって現象学の試みは、あくまで観念論の域に留まるものであったにせよ、自己超克の契機がある点で意義あるものであった。こうした（現象学を含む）観念論が困難をかかえるのは、生来からの拮抗関係のためであった。これが現象学の場合、論理絶対主義に帰結することとなった。だがこの拮抗関係は観念論の自己超克の契機にもなっていたのであり、まさに現象学はその超克を試みていたのである。そしてその限りにおいて現象学は反観念論的だったのである。さらにこの反観念論が、アドルノの構想した唯物論にもつうじている。彼の言う唯物論は、意識に汲み尽くされないもの、意識を超越したものにたいして問う立場であり、しかも観念論との関係なしに存立しえない主張として位置づけられる。このような構想のもとで彼は現象学に向きあっていた。そしてアドルノの現象学研究は、彼が超越をめぐる問題を現象学の中に見ていることに動機づけられている、ということも言えるのである。彼の亡命期間における現象学研究の成果は、後の『認識論メタ批判』の内容に結びついている。それは換言すれば、アドルノの現象学研究において、亡命期間におこなわれた諸研究は、『認識論のメタ批判』のための基礎となるのとともに、初期から後期に至る彼の現象学研究の橋に位置づけられるのである。

註

- 1) 引用文中のカギ括弧文は、アドルノがフッサールの『イデー』第一巻から引いた箇所である。また傍点は原文のままである。
- 2) フッサール自身が超越論的観念論をどのように考えていたかについては、彼自身の草稿を収録した全集第三六巻がある (Edmund Husserl, *Transzendentaler Idealismus. Texte aus dem Nachlass (1908-1921)*. hrsg. von Robin D. Rollinger, *Gesammelte Werke*. Band XXXVI, Dordrecht 2003)。アドルノがこれらの草稿の存在を知っていたとは考え難い。なお、このフッサールの草稿に関する研究はすでに多くおこなわれているのと同時に、本稿は現象学にたいするアドルノの理解が主題であるので、草稿について立ち入った考察はおこなわない。
- 3) 学位論文という性格上、アドルノの主張は基本的に指導教官であるコルネリウスの哲学に即している。コルネリウスは、「超越論的体系論はカントの超越論的観念論と一致する」(Hans Cornelius, *Transcendentale Systematik. Untersuchungen zur Begründung der Erkenntnistheorie*. München 1916, S. 263)と述べており、自身の哲学とカント哲学との合致を主張している。ちなみに、アドルノの未提出の教授資格申請論文「超越論的霊魂論における無意識の概念」(GS1. 79-322)でも、「超越論的観念論」は頻出する。この論文は、フロイトの無意識概念をカントの超越論哲学に即して再構成する試みである。したがって、ここでの「超越論的観念論」もまた、カント - コルネリウ斯的に理解されているのである。
- 4) アドルノは、フッサール自身も矛盾解消を試みていると理解している。その事例として彼が挙げているのが、ノエマの概念である (vgl., GS1 36ff.)。だがアドルノからすれば、このような概念をあらたに導入せずとも、現象学の自己批判、自己超克が可能だとされる。こうしたアドルノの姿勢は、学位論文に限らず、首尾一貫して保持されていた。
- 5) 講演をおこなったことに関するアドルノ本人による言及は、両親に宛てた 1939 年 5 月 21 日付の書簡の中に見出される (Theodor W. Adorno, *Briefe an die Eltern, 1939-1951*. hrsg. von Christoph Gödde und Henri Lonitz, *Briefe und Briefwechsel*. Band 5, Frankfurt am Main 2003, S.14)。講演がおこなわれた正確な日付は特定できないが、少なくともこの書簡が書かれるより前におこなわれている。アメリカ講演はその後、*The Journal of Philosophy* 誌に掲載された (Vol. 37, No. 1 (Jan. 4, 1940), pp. 5-18)。アドルノの全集に収録されているのは、この雑誌掲載の原稿である。複数の原稿が現存し、講演時に用いられたと推定される草稿もある。
- 6) 「構成」は constitution (Konstitution) の訳である。現象学研究においては、この語について、Konstruktion との差異とともに問題となるが、アドルノの現象学理解という主題の埒外となるため、その問題について本稿では立ち入った究明をおこなわない。ただしひとつ言えるのは、アドルノがこの語を使用する際に、カントの用法をつうじ

て意味を理解しているということである。

- 7) これと同時にフッサールは、「実証主義」ということで、絶対的に先入見にとらわれずに、いっさいの学問を実証的であるもの、すなわち原始的に把握されるものの上に基礎づけることを意味するならば、本当の実証主義者はわれわれなのである」(Edmund Husserl, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Erstes Buch. Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie*. hrsg. von Martinus Nijhoff, *Gesammelte Werke*. Band III, Haag 1950, S. 38) と述べている。彼の姿勢は、本稿後述の〈事象そのものへ〉のまなざしにつうじている。
- 8) このカテゴリー的直観にたいするアドルノの理解と批判については、拙論「内在的批判への道程 ——アドルノのイギリス滞在期間におけるフッサール研究」(『現象学年報』27号、2011年、97-104頁) および「アドルノとライル ——イギリス滞在期間におけるアドルノの現象学研究と分析哲学との接点」(『立命館大学人文科学研究所紀要』107号、2016年、131-156頁) を参照。アドルノは亡命期間におこなった現象学研究において、カテゴリー的直観の理論を中心的な問題のひとつとみなし、継続的に探究していた。それゆえこの期間の諸論考において、この理論をめぐる彼の議論は頻出している。その中でも、このアメリカ講演での考察は、アドルノの見解が要領よくまとめられている点で、彼の見解を理解するのに非常に有益である。Vgl., Jared A. Miller, Phenomenology's negative dialectic. Adorno's critique of Husserl's epistemological foundationalism. *Philosophical Forum*. Vol. 40, No. 1 (Jan. 29, 2009), pp. 99-125.
- 9) 講演は英語でおこなわれているが、一部でドイツ語を用いている。その場合には訳語に併記した。
- 10) 「事態」はフッサールの Sachverhalt の訳であり、アドルノはこの講演において item と英訳している。
- 11) アイデア主義という理解は、フッサール自身がすでに『論理学研究』第二巻においてもおこなっている (Vgl., Edmund Husserl, *Logische Untersuchungen. Zweiter Band. Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis. Erster Teil*. (1901) hrsg. von Ursula Panzer, *Gesammelte Werke*. Band XIX/1, Haag 1984, S. 112)。アドルノは『論理学研究』を読んでいるが、フッサールの理解が直接踏襲されていることを示す根拠はない。
- 12) このことは、とくに近代以降の観念論理解に即しているといえる。
- 13) ちなみに、たとえば次のような言い方も可能となる。充実は意識の志向にともなって、その意図〔=志向〕どおりに明証的になりうるのにたいして、唯物論において与えられるものは、その意図どおりに明証的になるとは限らないのである。
- 14) この頃にアドルノが社会研究所のメンバーらとおこなった討議では、あくまで観念論との関係において唯物論が議論されている。Vgl., Max Horkheimer, *Wissenschaft und Krise. Differenz zwischen Idealismus und Materialismus. Diskussion über Themen*

zu einer Vorlesung Max Horkheimers]. hrsg. von Alfred Schmidt und Gunzelin Schmid Noerr, *Gesammelte Schriften*. Band 12, *Nachgelassene Schriften 1931-1949*, Frankfurt am Main 1985, S.349ff. その後アドルノが現象学との関係で唯物論を論じるのは、『認識論のメタ批判』にまで続くことになる。とくに、あらたに書き上げられた第三章において展開されている。ちなみに本稿で取り上げた主題も含めて、亡命期間中の彼の現象学研究は、この『認識論のメタ批判』にまで引き継がれている。

- 15) もちろん、ここにはアドルノの政治的配慮があることも否定できないであろう。講演がアメリカでおこなわれていること、彼自身がドイツからの亡命者であること、そして社会研究所がマルクス主義からの影響を否定できないことは、彼の発言に影響を及ぼしているであろう。Vgl., Stefan Müller-Doohm, *Adorno. Eine Biographie*. Frankfurt am Main 2003.

* 本稿は、日本学術振興会科学研究費 17K20193 による研究成果の一部である。

凡例

本文中の 〈 〉 は意味のまとまりを表示したもの、() は補足表示である。

引用文中の [] は、訳出に際して補足したものである。

引用文は拙訳であるが、邦訳があれば適宜参照している。

人名については、敬称を省略している。

文献および文中略号

Theodor W. Adorno, *Gesammelte Schriften*. 20 Bände, hrsg. von Rolf Tiedemann, Frankfurt am Main, 1970-1986 (GS と略記、全集版の巻数と頁数を表記)

Theodor W. Adorno und Walter Benjamin, *Briefwechsel 1928-1940*, hrsg. von Henri Lonitz, *Briefe und Briefwechsel*. Band 1, Frankfurt am Main 1994

Thomas Wheatland, *The Frankfurt School in exile*. Minneapolis 2009

Peter E. Gordon, *Adorno and Existence*. Cambridge 2016

Martin Jay, *The dialectical imagination. A history of the Frankfurt School and the Institute of Social Research, 1923-1950*. Boston 1973

Rolf Wiggershaus, *Die Frankfurter Schule. Geschichte, theoretische Entwicklung, politische Bedeutung*. München 1986

Richard Klein, Johann Kreuzer, Stefan Müller-Doohm (hrsg.), *Adorno Handbuch. Leben-Werk-Wirkung*. Stuttgart 2011

